

## 文芸作品の読み方を学ぶことで知る人間と世界

文学部 寺澤 浩 樹

1960年生まれ。東北大学文学部で国文学を専攻、武者小路実篤の文芸を中心に研究を進め、同大学大学院文学研究科博士課程を中退。福島工業高等専門学校、甲南大学文学部教員を経て1992年より文教大学文学部教員となる。現在、研究は『白樺』派全体に及ぶが、最近では社会や学生の関心の推移とともに、文芸論から文化論的方向に興味を広げつつある。(てらさわ・ひろき)



大学の文学部ではどのようなことを勉強するのか？この問いに対する様々な答えの一つが、この表題である。ここでは私の担当する日本語日本文学科専門科目の中から、一年次指定の「日本近代文学演習Ⅰ」を最初に簡単に紹介したい。次に二年次以降指定の「日本文学講読Ⅳ-(1)」については、今年度春学期最後の二回の授業を中心として、その具体例を紹介したい。

### 一

一年次学生に文学の勉強について問うと「小説を通して作家の生き様を知りたい」という答えが圧倒的に多い。かつて自分も同じように考えていたわけだが、これは小学校以来の国語科の教育によるものと思われる。この答えには、文学は人生や社会の反映であるという思想が含まれる。また、文学には読みとられるべき道徳が存在するという考え方も見えてくる。

大学では、こうした文学に対する固定観念をいったん取り払い、われわれの日常にそれとなく存在し、自由な態度で楽しく臨める対象として、文学を見直すこととなる。その上で、文学の反映論や目的論をも含み、さらに広い視野から文学を読み、考える様々な方法を学んでゆく。表題に「読み方を学ぶ」と最初に書いたのは、そのためである。

一年次学生の「日本近代文学演習Ⅰ」（春学期）および「同Ⅱ」（秋学期）では「小説を研究として読むトレーニング」と銘打って、読む・書く・話す・調べる・考えるといった基本的な訓練を、30人未満のクラス指定による、演習形式の授業を通じておこなっている。受講者の発表および討論をその内容とする。新

潮文庫版の川端康成『掌の小説』に収められた短い作品一編ずつを、授業一時限につき二人の受講者が発表し、その後グループに別れて討論している。なお、この授業では先行研究の調査を義務としていない。先人の解釈によらず、学生自身の独創的な読み方とそれを整理する能力の育成を目的とするためである。



グループ討論

発表者が何日もかけて考え、整理してきた内容を直ちに理解しなければ、各受講者はグループ内で発言することは難しくなる。そのために、発表中の教室は静粛で集中した空気が漲ることになり、逆に討論では時に真剣に時に和気藹々と盛り上がっている。それだけに、授業の最後で各グループから発表される意見には、耳を傾ける価値のあるものが多い。

発表者は頷きながらそれらをメモし、学期末のレポート作成の資料とする。

## 二

二年次以降の学生が受講する「日本文学講読Ⅳ-(1)」(春学期)および同「(2)」(秋学期)では、テーマおよび研究対象を「小説に書かれた〈私〉とは何か—太宰治『晩年』の研究」と設定した。シラバスには「作家にとって小説の中の〈私〉とは何だろうか。それは本来虚構である小説においてどのように考えたら良いのだろうか。実生活のエピソードでも有名な太宰治はまた、虚構の仕組み自体を対象とする新しい手法を試みた作家でもある。その第一創作集『晩年』に収録された作品を読みながら、この問題を考えていきたい」と説明してある。こうしたテーマ設定の難しさによるのみならず、一年次の「日本近代文学演習Ⅰ」および「Ⅱ」ではあえて指示しなかった先行研究も十分に調査、批判することを義務づけている。

この授業は、二年次学生から四年次学生までに開かれた(ただし今年度は旧カリキュラムの四年次学生を含まない)選択必修科目のため、クラス分け等の受講者数指定はできない。予想通り受講者数は70名弱と、講読科目に適した人数を超えている。しかし、学生の受講の意志を第一に尊重し、あえて受講制限はおこなわない。ただし、授業は毎時間ごとに2~3名の学生による発表とそれに対する質疑という形でおこなわれるため、この人数では十数名の学生が授業での発表をレポート提出という形に代替せざるを得ない。

筑摩文庫の『太宰治全集』第一巻をテキストとして、これに収録された20の小説を、収録順に、春学期と秋学期の計24回の授業で読む。発表担当は上級生から順におこなうが、本年度はテーマをよく理解した、意欲ある四年次学生が単位取得とは無関係に模範発表に臨み、授業の質を上げることに貢献してくれた。

## 三

春学期最後の2回の授業では、テキスト収録8番目となる「道化の華」が前半後半の二つに分けて扱われた。前半は二人の発表担当学生がそれぞれ二枚ずつの資料を作成した。最初のA君の発表タイトルは『『道化の華』における「僕」の役割』。発表資料は、開講時にそのモデルが提示されており、Ⅰ梗概、Ⅱ書誌、Ⅲ語釈、Ⅳ構造、Ⅴ考察およびまとめとなっている。学生は資料に整理されたこれらの各項目を読み上げ、適宜補注を付け加えながら発表を進めてゆく。「語釈」は時に多数にのぼり、重要なものだけを読み上げるにとどまることが多い。「構造」をどのように整理するかという問題は、それが作品解釈に深く関わるだけに、発表担当学生の悩み所となる。A君は主人公の心中未遂から入院二日目夜に至るまでの時間経過を基準として叙述を並べ替えた図式を作り、それぞれの時間に登場する人物を大人と青年に分類、整理した。この資料によって①大人と青年は対立するが大人は常に青年を介して語られること、②一方で青年は俗世を笑い飛ばしつつもそこから逃れることもできないこと、の二点を指摘した。「考察」では、①主人公は作者自身をモデルとしながらも、ありのままの事実を書かず、誇張などを含む点、②作中の「僕」は私小説にはあるまじき言動を繰り返している点などから、むしろ作者は私小説のパロディーを書こうとしたものである、と結論づけた。発表後の質疑では、当然ながら「構造」と「考察」のつながりが問われたが、A君自身もその問題を残したままの発表となってしまったことを認めた。

次のH君の発表タイトルは「道化の華(前半) — 〈僕〉とは? —」であり、「構造」はモデルとしての作者の体験と作品の主眼との関係を、手短かな文章にまとめたものだが、ここにはその関係の構造を示すべきである。「考察」は発表タイトル通り、作中の語り手であると同時に登場人物でもある〈僕〉の解明に絞られ、①作品世界と登場人物を超越し、それらに註釈をくわえる「僕」、②創作行為自

体を問題として自らに言及する「僕」、③作家太宰治自身である「僕」の3つの側面を明らかにした。

A君、H君の二人の発表には、この小説にそうした手法が用いられた効果に関するコメントがないという共通する不足部分があったので、次回後半を担当する学生への課題となった。なおH君の「語釈」に挙げられた「マルキシズム」について、改めて受講生に質したところ、多くの学生がこの思想を詳しくは知らなかったため、私が補足した。



教室はいつも満杯

#### 四

後半を担当したYさん、Kさんからは、それぞれ単独ではなく、協力して一つの発表としたいとの申し出があったので認めた。翌週の二人の資料は『「道化の華」—メタフィクション構造の中の「僕」の役割』というタイトルで、7枚の資料という力作となった。問題となる「構造」については、まず①「作品全体の構造」として四重の同心円の図式が示された。中心は主人公「大庭葉蔵」、その外側には「僕」と「君」、その外側には「語り手」、さらにその外側には「書き手」がいることになる。これによって「僕」は「語り手」の内側に存在する登場人物であることが明らかにされた。また、「書き手」も厳密には「太宰治」と「津島修治」の二つに分けて考えるべきことも指摘された。次に②「僕」の機能として、4つの側面（全知者・註釈者・自己言及者・演出者）が指摘された。このように作品のパラディグマティックな構造とそれらの境界を超越する「僕」の機能とを分離した点は、前週の発表を踏まえた上でより正確となった

ものと評価される。また、タイトルで用いられている「メタフィクション」という用語の定義と特質が先行研究から引用、説明された点、太宰にその手法を用いさせた動機とされるジッドの「ドストエフスキー論」を引用した点も評価できる。そのほか、モデルとしての太宰の鎌倉心中事件に関する資料が引用された。



膨大な発表資料

「考察」では、作品の内容に深く切り込むこととなった。YさんとKさんは心中事件のモデル田辺あつみに同情して「太宰最低！」と言いつつ、と資料に率直に書いている。そこから、なぜ心中事件が題材とされたのか、という問題意識によって、小説の戦略そのものを考察する方向に向かった。作中の皮肉や黙説といったレトリックも綿密に解釈された。そして、前回から持ち越されたメタフィクションの手法を用いた意義を、①「僕」は主人公たち三人の青年の道化の演技性を暴露する者であり、②その「僕」自身もまた自己の道化の演技性を暴露する者であり、それによって読者に作品への同情と理解を求める気持ちが直接に表現された、とした。したがって関心は自ずと「道化」と「華」への考察に進む。あだ花の裏に隠された、青年に特有の虚栄心と求愛を指摘し、YさんとKさんは、「作者は登場人物に同情する形で、痛々しく虚しい人間の悲しさを物語った」、と結論づけた。こうして読み方の研究は、小説に描かれた、という特殊性を踏まえた上で人間と世界を知ることにつながっていった。

## 五

YさんもKさんも、三年次学生ではあるが、近代文学ゼミナールの学生ではない。しかし、彼女らは発表前から私の研究室に何度か訪れ、質問に来ていた。また、先行研究も綿密に調査・収集・整理し、協力して資料作成を進めるために同居生活を送り、睡眠時間もかなり少なかったそうである。四月にこの授業の模範発表を引き受けてくれた四年次学生も、やはり同じように協力しあつての準備だった。彼らをこのように駆り立てる力は、授業の中から自ずと作られる雰囲気から発生するもの

であろう。その根底にあるのは、学生一人一人の意欲にほかならない。

私が後見し、学生のみによって自主的に運営されている「読書会」という活動がある。五年ほど前の、やはり意欲的な学生たちを中心として作られたもので、週一回、放課後に十名前後の学生たちが集まって内外の小説を読み、討論している。ときおりOBとなったあちこちの大学院生たちが顔を出すこともあるらしいが、院生や教員のいない所での自由闊達な意見交換の場も、彼らには貴重である。授業の外側に、授業の目的が達成されてゆく。